



第176回くらしの植物苑観察会 2013年11月23日(土)

「菊の名は」

平野 恵 (台東区立中央図書館 郷土・資料調査室 専門員)

菊には、花銘(花の名前)がたくさんあります。今回は、菊に付けられた様々な名前を分類して、近世園芸文化の一端をひもといていきたいと思います。

歌川国芳が描いた「百種接分菊(ひゃくしゅつぎわけぎく)」には、百種類の菊の名が記された短冊が描かれています。このなかから同時代の花銘を探し、その姿と花色を調べました(表1参照)。

表1 「百種接分菊」のうち他の史料に名があるもの

	銘	史料	色・形状・大きさ	色
1	朱玉垣	⑥⑦	⑥紅丸抱七走	赤
2	井出の里	⑦	黄	不明
3	入日の海	⑦⑬	⑦紅筒⑬赤の部	赤
4	薄化粧	①②④⑦	①②薄色同(抱)④薄色折抱敷走	薄色
5	江戸自慢	⑤⑦	⑤紫追抱敷走⑦紫管	紫
6	黄金の滝	④⑪⑫⑬⑮	④黄ㄥ(カゝへ)	黄色
7	大江山	⑬	絞の部	不明
8	かゝり火	⑬	赤の部	赤
9	鎌倉山	⑤	紫カマヨレ敷走	紫
10	金花山	③④⑦⑧	③黄移抱敷走④白カゝへ／黄糍折抱敷走⑦黄⑧黄ゝ(抱)	黄色
11	金孔雀	⑦	黄	黄色
12	金猩々	⑦⑩		不明
13	金ぼたん	⑦		不明
14	狂獅子	⑦		不明
15	小紫	⑨	中輪	紫
16	砂金袋	①	白カゝへ	白
17	桜貝	⑦		桜色
18	桜かり	③⑦⑬	③薄色抱⑬薄の部	薄色
19	桜流し	⑦	薄色	桜色
20	さくら丸	⑦	薄色	桜色
21	四海波	①⑬	①白丸抱管走⑬紫の部	白
22	篠田の森	⑩		不明
23	猩々舞	①⑦⑪⑫⑬⑮	①紅折抱七走／紅紫丸抱七走	赤
24	白糸の滝	⑤	白ヨレ	白

	銘	史料	色・形状・大きさ	色
25	世界の図	⑪⑭⑮		不明
26	仙家の雪	⑬	薄の部	薄色
27	大平楽	⑦⑬	⑦薄⑬薄の部	薄色
28	高砂	⑦		不明
29	宝舟	⑦⑪⑬⑮⑯	⑬黄の部	黄
30	田毎の月	⑬	白の部	白
31	立田川	④⑨⑯	④紅爪折抱七走 ⑨外薄きから茶内紅⑯赤の部	赤
32	伊達道具	⑦	糍	糍
33	力自慢	④	糍ㄥ(カゝへ)	糍
34	錦の袂	①	紅紫折抱七走	赤紫
35	浜にしき	⑦	紅	赤
36	富士の霞	④	白爪折抱七走	白
37	舞鶴	⑧⑯	⑧白丸抱七走⑯白の部	白
38	峯の雪	⑦		不明
39	みの亀	⑦		不明
40	武蔵野	⑦	紅	赤
41	陸奥山	⑤⑩	⑤黄カゝへ	黄色
42	紅葉の賀	③	紫カゝへ	紫
43	百ちとり	④⑯	④薄色抱⑯薄の部	薄色
44	楊貴妃	⑨	中輪	不明
45	吉野山	①⑤⑥	①紫折抱発走⑤薄色爪折抱七走 ⑥薄色追抱七走	薄色
46	四方の詠	②	黄抱	黄色

①弘化2年(1845)10月14日②弘化2年10月20日③弘化3年9月26日④嘉永元年(1848)10月17日⑤嘉永元年10月23日⑥嘉永5年10月5日⑦嘉永6年10月23日⑧嘉永7年9月27日(以上①~⑧『菊の香』掲載番付)⑨弘化3年『菊花檀養種』⑩安政2年(1855)晩秋『竹室園中造菊数』⑪明治13年5月8日⑫明治13年5月⑬明治13年10月⑭明治14年5月11日(以上⑪~⑭『菊花植付記』)⑮明治17年1月「植替覚帳」⑯明治中期『曲咲大輪ノ菊』

このように、浮世絵に描かれた菊の名と文献資料を照らし合わせることによって、大きさ、色、形状などがわかりました。

それでは、江戸時代の花銘のつけ方を、具体的に見ていきましょう。

地名 石清水・明石・須磨浦・有明・三笠山・飛鳥川・吉野山・二見ヶ浦・陸奥山・武蔵野・桜川・檀特山など

「石清水」「二見ヶ浦」など古くから知られた名所を、菊の名に付すものが多くありました。歴博では、「下谷紫」「下谷藤娘」「下谷金鶴」など、東京台東区北部の広域地名「下谷」を冠する江戸菊が目立って多く、東京の地名では、ほかに「荏原紫玉」「多磨の紫」がありました。

価値 無類・三国紅・世界の図・万寿無類・四海外・四方里・天地開闢・天ニモ地ニモ・天ガ下・知仁勇・折紙附・普天の下・天下一・前代未聞・価千金・古今勝劣・引手餘多・五大州・驪龍の珠など菊花の稀少性や価値が高い点をあらわした命名が多く、「世界の図」「五大州」などは地理上の価値、「前代未聞」「古今勝劣」などは時間軸上での優劣をうたったものです。現在も栽培される食用菊「もってのほか」も、常識外という価値観をあらわしています。

自然現象 名月(白)・明の月(白)・月の雫(白)・月の都(黄)・黄昏月(黄)・天の河(白)・千丈滝(白)・海之面(白)・波の皴(白)・銀世界(白)・霜柱(白)・薄氷(白)・俄雨(桃色)・四海波(紫)など自然現象を菊の名に付けたもので、「月」であれば白や黄色の花、「曙」「黄昏」であれば黄花、「雪」では白、「暁」では赤などと、花色から連想した名が圧倒的です。歴博では、「丘の曙」「窓の月」「暁紅」などが、この分類に該当します。

擬人 器量競・京美人・未美人・美人揃・美人競・美人鏡・半面美人・美人粧・美人眈(まなじり)・ほろ酔美人・華容婦人・笑ふ門・笑ひ小町・大笑ひ・ほろ酔機嫌など
菊の花を人に見立てて名を付したもの。美しさを女性にたとえた「美人」と付く花銘、「美人揃」「美人競」などたくさんあります。また感情、特に「笑い」をとり上げた銘も多くありました。歴博にもある「酔美人」は、江戸時代後期にもあった銘です。そのほか「母の愛」などもこの分類に入ります。

服飾 紅葉襲・しき帯・花見小袖・紅の袖・ひの衣・誰か袖・烏帽子折・御狩の衣・布晒・丹前羽織など
色・形 大紫・縮紅・紅丁字・金覆輪・白糸・韓紅・両面紅・紫重・黄金色・へにから(紅がら)・色くらへなど

動物 濡鷺・白雁・蜂の巣・鶉合・鯉の高浪・鶏冠紅・浜千鳥・大鵬・阿蘭陀狸々・臥龍の玉など

植物 唐松葉・藤葛・荊棘・桔梗結・おた巻・雪の下・椎ノ木・吉野桜・桃花の唇・散り紅葉・芙蓉の眼尻など

吉祥 宝舟・千代八千代・玉手箱・笑布袋・百福寿・寿・七福神・高砂など

和歌 雁の玉章・千早振・千載集・歌尽・藻塩草・和哥浦・鳴立沢・哥枕・小倉山・小倉式紙など

ここに掲げたのは、菊の花銘のほんの一部ですが、江戸時代の人びとの教養の深さがうかがわれます。観察会では、こうした菊の花銘のほか、薔薇や梅など同じ銘を持つ植物についても紹介します。

.....

次回予告 第177回くらしの植物苑観察会 2013年12月21日(土)
「サザンカの名前とその変遷」(恵泉女学園大学 名誉教授 箱田 直紀)
13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合 申込不要